無垢の喪失

デイラン・トマスの詩集「死と入口」

久納泰之

苦悩のなかの視点
トマスのエネルギー
性生と死
エデンの園
感情のひろがりとその暦界
詩集

初期のシンボル群はトマスの暗黒の世界を示唆する。だが、暗黒から光明を目指す個人的闘争のなかで、彼は次第にその定点を移動し、いくつかの新しい世界を発見していった。

ソネット「Altarise by evil-light」以後、トマスはその特殊なシンボル群の大半を破棄し、彼の人生観の変容にともない新しいシンボルと新しい用語の創造を図った。

作家のなかには情動は晦渋性を通じて高められる、と信じている者がいるが、そのような情動は白昼の太陽に照らされ、たちまち姿を消してしまうものだ。というH. D.の言葉を引いてかなり批判的な説明を試みた。だが、

In the name of the wanting
Am found.

I

The sky.

Christened down

But the loud sun

to the hidden land

I could turn back and run

Sun. In the name of the damned

In a blessing of the sudden

I turn the corner of prayer and burn

In the center of dark I pray him

Lost on the unrisen mountain
無垢の喪失

後期のトマスが愛から信仰への過程を辿ったとしても、僕たちは、彼の詩のなかに、トマスが他者の思念や感情を自身の感情の対象物としてのみそれらを捉えているのである。他者の視点に立って感得した跡を見ることは結局不可能であった。他者の置かれた情状を見ると、トマスは常に彼自身の感動の対象を伝えるのができる。だが、その感動は他者と同一体になって体験されたものではない。トマスの詩は他者の無限の感動を投入するのです。そのなかに彼の特殊な主体的感性が他者に向かわれている、という点においてであり、他者の苦悩や感動は、その子供の体験を像想して共感的に苦しむのではない。他者に対して共感的感動を覚えることは決してない。他者の恐怖や苦痛を外から考察するトマスの決意は彼個人のための決意であって、その子供のためになされるわけではない。

Never until...
Is come of the sea tumbling in harness
Shall I let pray the shadow of a sound
Or saw my salt seed
A refusal to mourn the death by fire of a child in London.

The mystery and burning of the child's death.
(Poem in October)

On this high hill in a year's turning
Still be sung
O may my heart's truth
短かいものである。詩自体の息が短かい。ほとんどの一行をひとつの単位とし、その鼓動は不規則で、力は安定を欠いている。黙しろ、動悸を打ったと思う。この瞬間、衰えを見せて、ばたっと動きが止まり、突然、ふたたび鼓動が

さらにトマスの想像力は、ときめく気を起こして、幻想と夢のイミージを徹底的に洗いあげようとする。これは往

往にして失敗し、あとに残される無意味な怪奇極まるイミージの巨大な集積に僕たちは直面する。

トマスの詩の多くは激情の詩でもある。だが、それは社会組織、政治、そして芸術などへの怒りではなく、彼自身へ

の激烈である。彼はRimbaudの如く、国を離れて幻想の撲索に世界を流れる、赤裸の原初性をそなえた詩人であ

る。彼は名声から逃れ、自らの幻想から逃れる即ち伝統の焦点から逃れることによって自己の安楽につとめた。文学

的伝統の枠から後退しながらも、同時に、不正の洞窟へと引きずりこまれるように、その枠のなかへ呑み込まれて

く自分を感じているのである。これはトマスのピューリタニズムであり、知恵である。

トマスの散文には多様性がある。厳粛から滑稽に至る多くの感情が交錯する。そしてそのなかの性格の変化を

は変化に富んでいる。だが、詩人としての彼は偉大であると同時に、唯一の性格しか見せないという反面を持っ

ている。極度に絞り化された感情の極度に濃縮された哀情と凄涼の詩人である。そこには機智や上品さ、優

雅や洗鍊はない。あるのは怒りである。しかもAchillesの怒りである。あるのは絶望である。すべての激情が煮沸する釜のなかで、すさまじい熱気を噴きあげているのである。

☆
セックスを中心テーマにした詩を除いて考えると、セックスが信仰と知識の手段として用いられている詩がいくつも見出される。人間はすべて病気であり、この世界はひとつの病院なのだ、という現代文学の常套句をかきながらトマスは、そこにトマスは、おそらく、Friedrich そして原始社会の Fertility Ties（ヒーローズでは現存しているという）を示唆しているのであると、すべてが Henry Miller や Freud などの現実のなかへ抑しこまれることになる。赤からトマスは現代病の患者の回復に対する確信を失いはじめる。トマスがたっての場合、苦渋的表情を見せる情愛（Love）のかわりに、セックス（情愛の手段であり、肉体的プロセスである）が失われている。そして反面、セックスとしては、トマスが何度も言っているように、生殺与奪の権を所有しているのである。ねばねばする。だが、情愛はますます速くへ去り、セックスは恐怖となり死のミサとなり変わってしまう。生誕の死ははじまだ、という鷹兎によりかれた詩人は袋小路を歩き出した。この命題はトマスの詩の基底となすものであるが、この両者を繋ぐひとつの世界が創出されなければ、まったく意味のないものとなる。トマスはこの命題から離れることができず、セックスは情愛の過程、攻撃、敗北、恥辱、絶望の上に自分をたたかれかせようとする。その成功を疑いながらトマスは、幾度も繰り返して、情愛のために、儀式的な法式をもちだしてみる。だが、現実性がないために、その過
Born

sea

The
Shaming it was Adam and maiden,

With the dew, come back, the cock on his shoulder: it was all

And then to awake, and the farm, like a wanderer whole

Venus Hr. of earth

And up with Adam.
The finding one

Praised the sun.
About the Hilling house and happy as the Grass was Green

Now as I was young and easy under the apple boughs...
無垢の喪失

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>式</th>
</tr>
</thead>
</table>
|無垢の喪失

僕

沈黙した石のようく

ミソサザイの骨のように

壁のそばで　そして　薄明のなかの

磔形の影を宿す冠をつけ

明日の運命を　振りあてる

幼児の言葉を聞く

歌声は　つづく

奇跡の

荒れ狂う

僕をその名とそのほのほで焼きつくすまで

そして

灼熱の冠で

突き抜かれた

壁は

明るい　光に　むかって

みどり児の　腰から

引き裂かれ

ひろがっていく

暗黒

（幻影と祈り）
トマスはキリストの実体の二重性を、その詩のなかではっきりと描き出す。謙虚な声で、高ぶる者、権力と富と傲岸とにふくれあがった者へ呼びかける。と同時に、「口にかがり火」を持って生まれた子は、その呼びかけが、恐怖と無気力と烈しい敵意に迎えられることが知らされ、警告を発すのである。『われ地に平和を投げなために来れり』（マック21）

トマスの性（生と死）への歪執からの移行と、受動性と熱烈な歓喜の置換にともなって、ロマンティシズムの様相があらわれてくることを、メデウス氏は指摘する。それは自然の讃美と「幼少期への復帰」といわれてもよい。孤独な本能が現代社会の呪縛から逃れようとして選ぶ道である。死によるまことの生命の復活をうたうと同時に詩人は生の圧制と崩壊、生の械化と人間疎外という現実を直視したからならばならない。これらの様相を如実に映し出している現代文明はひとつの中荒地なのであるが、それはまた、ロマン派の詩人の目には、傀儡のように、規制の系にあつまされる嫌悪すべき存在でもある。孤立した魂は「崇拝なる原始」へ、原初的存在へ、自然と純朴と無垢の世界へ回帰する。

こう考えればトマスの情感のひろがりの限界性とひとつのが性格への制約とは、ある意味では、彼が高潔な叙情の詩人であったことを示すわけだが、これを過大評価するのは危険である。このように極めて限定された傾向をもつ詩人は、至高のものを目指し、それを完成するか、さもなければ、蹉跎する。
無垢の喪失

ロマンティシズムの伝統的なテーマに復帰したトマスではあったが、彼がそれらのテーマを詩のなかへ採り入れる

詩人の社会への闘争の部分的な解決の二つであった。この地点で彼のロマンティシズムは終わってしまう。だが、そこで

詩人をもった社会的運動に連なるものではなかった。それは社会の束縛に対する個人的反撃の吐け口と

トマスは、自分が生死の懸け橋、自己と世界との懸け橋をもたないことをはっきりと認識した。彼の詩は、彼自

身の言うごと、極めて直写的（絶対）なものである。だが、その直写性は、終始、意味ありげに見える文学の挑

戦なのだ。偉大なシモーヌの上で狂騒詩をつくり、詠唱するには、トマスはあまりに責任的であった。彼は、小さな
Once below a time

Into her light Down Head

Henry Treasa & Dylan Thomas (p. 91) & the cezawen & n. X. A. a. c. 1943

The Poem in October "By Reiner to Mourn the Death by Fire of a Child"

Aharmeez by ouleight N. J. T. T. N. a. c. 1940
Life and Letters To-day

(1930) Horizon

(1914) Among Those Killed in the Dawn Raid Was a Man Aged One Hundred

“…” In my Chair, or Sullen Art

“…” The Conversation of Prayer

“…” This Side of the Truth

“…” The Still, Sleep Becoming

“…” Poem in October

“…” Vision and Prayer

“…” Request to Idea

“…” The Hunchback in the Park

“…” There was a Savour

“…” Ballad of the Long-Legged Bear

“…” Deaths and Enfants
表現を与えようと意識しはじめた、と考えられる。とくに、詩集「死と入門」の題名はJohn Donneから採られたと
いう事実が示すように、トマスが人間の死と崩壊の不可避性を悟り、初期の詩における狂人めいた情動と大仰
な「死と入門」の題名を採用したことが、死の重要性を強調する意図を示していると解釈される。死は、個人の
存在を規定する重要な要素であり、トマスはそれを詩で表現するために題名を採用した。このトマスの死への
認識は、彼の詩集の構成を決定する重要な要素である。
「おのれの自刃」

「おのれの自刃」

生命の重要性を認識し、自我を強く目指す。この意志は、己の力によるものである。

自我を強化し、生命の重要性を認識する。この意志は、己の力によるものである。
詩集「死と入口」に見られたトマスの詩的展開をしめくる作品。それはこのような苦悩と慰安の起伏のあとで登場するFern Hillである。この詩を唯ひとつの相から観察するとなれば、「失われた青春を讃える悲歌」といえるか、または悲哀を発しはじめる。幼年時代の田園の理想郷を跳躍台として、トマスは回想の烈しい息づかいのなかで、田園の花のように金色の光に満ち、純粋と永遠の流れが楽園に飲み込む音を伝える。が、やがて、その歎びは崩壊と移るゆく時を支配す、悲哀の彩りをもってはじめる。

トマスは幼年時代に自己の安息所を見出し、そしてこの桃源郷のなかに詩人の「無垢の眠」（The Innocent Eye）がある。この眠は詩人の心に幼児の小宇宙を的確に焼きつけた。Fern Hillに流れるひとつの調べは幼年期を遠く回る人と生活の現実から後退するトマスは、幼年時代を回想的に眺める過程で、現世の至福と理想という頂点に近づいていく。彼が「十月の詩」のなかで、
僕の名前を翼にのせて飛んでいく
水鳥や樹間にたわまれる鳥たち
とろしょ歩み。また、
春の風がにあふれたヒバリが、流れ
雲のあいだに飛び、路傍の茂みのあちこちで
ソグミがさえずり、そして、十月の太陽が真夏のように
照っている丘を逍遥し、
陽の光の
緑の教会堂の伝説のなかを
進んでいくとき、天国と天上的愛は間近かに迫ってくる。そして、幼年時代の草原のなかを
また、僕の心に焼きついている、あの幼年時代の草原のなかを
あった。トマスは幼児の小宇宙の主人公であり、荷馬車に囲まれて謡えられ、リンゴの木によじ登って、王子への憧
偊たのはHenry Treeceの“he is telling us that all this happened when he was very young, not once upon a time, but
below a time, below the measuring mark, as it were”という説明にも注目すべきである。それに草が終日青々と輝いていることから来たもので
茂っていたように幸福な”(happy as the grass was green)という句は草が終日青々と輝いていることから来たもので
というステロ的表現を避けたもので、類似の句は第二連の、
And the green as grass,

And phoebe, lovely and lovely

was air

Fields high as the house, the lines from the chimneys, it

All the sun long it was running, it was lovely, the hay

In the sun that is young once only
The Lamb which走 (he Lamb which走)

honored among foxes and пеasants)

of the darkness (the horset

the Lamb which走 (he Lamb which走)
Though I sang in my chords like the sea,

Time held me green and dyed.

Oh, as I was young and easy in the mercy of his means.

Pens Hill where I stood.

Lift to the sandlow throned oft by the shadow of my hand.

Take me...

That time would
彼の詩集のあるページには比較的落ち着いた明確な詩が現れる。この安定性の欠如に対する彼自身の不満感は、単純な詩像をも曖昧にしてしまうというトマスの技巧による。彼は説明的な引用符、句読点、タイトル、連結詞などをすべて取り除いた。そこで、論理や文章への顧慮は必要であるとは言え、さまざまな作品の多い彼は、反面、複雑で捕捉しにくい。

初期の詩においては、おびただしい想念や感情、極度に圧縮されたひとつの結晶を形成しているが、後期になると、ひとつつの思念、ひとつつの感情がぎわぎわの限界までひき伸ばされ、ときに、その限界を超えるものさえ見られぬ。奇異なことには、トマスはいつでも詩を書くための瞬発にと答え得た。言語はそのまま後期になつて用語を過剰のための海面へと姿を移していった。前の詩においては累積の手法を変った。そして弹唱は限界を突き破り、詩人の彼女は詩の言葉から生じた海をまかなせる詩人は流れた。後期の詩においては、感情が漂ってはいないか。僕たちはそれを弾劾するのではなく、それがよくすられた作品の形成に必要であったのだ、という想いが醸されるようだ。
トマスの死に随伴した乱心は挫折の乱心であった。彼は、その短篇、書信または、対話のなかで、この挫折を跳び
こえてラブレ（Francis Bacon）風の信仰へと移る努力をした。とKarl Shapiro氏は言う。だが、ついにそれは
空しい響きをともなって終末にきた。歓楽極まりない哀情に浸る。それは欲望の叫びではない。翼に落ちた動物の叫びである。
人間への転身を願う生物——そして神（？）への転身を祈る人間の絶叫か。

トマスは人間のなかの原始的動物性を描き出す。詩人にとって動物性がすべてであり、彼がそれを動物的なもの
と呼び、雲魂とも、本質とも、また可能性とも呼ばない故に、僕たちは耳を傾ける。動物は自然に生き、自然
の子であり、自然の動きを横へそらすこともない。——動物は彼らの現実に反したものを信じようと
はしないのだ。

不幸なことに、トマスは彼の動物から引き離された。彼は親になったのだ。そのことをトマス自身は知覚した。こ
の野獣的な相において、トマスの詩はその対象を容赦なく骨の髪まで切り裂いた——それはひとつの切開であり、惨
殺でもあり、さらに残酷な結末をすら暗示する。そしてトマス自身こそ、彼の詩の唯一の主題であるが故に、僕たち
には、何がその悲惨な切開を受けねばならなかったかを知るのである。彼が悲劇的でも神秘的でもなく、また、怨霊にもならな
ることができない天赋の詩人であった。彼は無理時代への、また、世界の創造時代への回想という
塔のなかへ自己を投入しつづける。ここで僕たちは「五篇の詩」のなかのある一節を想起する。

814
(Bars in the tutels here)

Hold you poison or grapges?

Hands of the stranger and holds of the ship.

Ships, hold you poison or grapges?

And welcome no sallor?

Or stay till the day I die

With the wind in my hair,

Shall I run to the ships

Ships anchor off the bay.

Eyes in this island see

The wind pass like a fire,

Bars in this island hear.
And all your deeds and words,
Is cast before you move,
Water and light, the earth and sky,
And animals and birds,
Down the beginning of paths
And the wicked wish.

(VISION and PRAYER)

I light
To light
From his join
And the dark thrown
By his torted crown
And the wicked wall is join
Burns me his name and his name
Until the turbulent new born
And the midwives of miracle still
Casting tomorrow like a thorn
And the shaded head of pain
Of the mother hidden
Wall hearing the man
By the worn done
Still as stone
Must lie
I
Poem in October

Blackbirds and the sun of October
Clouds and the roadside bushes humming with whispering
A sprinkling of larks in a rolling

Above the farms and the white horses
Birds and the birds of the winged trees singing my name
(May Birthday began with) the water-

Among those Killed in the Down Road was a Man Aged a Hundred
And a hundred storks perch on the sun's right hand.
The morning is flying on the wings of his age
O keep his bones away from that common cart,
Assuming wings for the speed of the cage.
The heavy cadge drawn by a wound
Died no more for the ciphers of his grey-hatted heart.

Holy Spring

And I am struck as lonely as a holy man by the sun.
To glow after the god shining night
Call for confessors and wiseer minister but there is none
That dark one I owe my light.

I climb to greet the war in which I have no heart but only

This Side of the Truth

Die in indifferent love.

Each truth each lie,
And the twice told rhymes of infancy
And the legend of the green chapels
Of sun and light
Through the parables
(On the hill's shoulder.

(192)

Karl Shapiro: In Defence of Ignorance (Random House, New York)
Elden Olson: The Poetry of Dylan Thomas (The University of Chicago Press)
W. R. McNickle: Essays on Confronting Poetry: Literary (Kenkusha Ltd., Tokyo, 1999)
Derek Strange: Dylan Thomas (Theville, Spearmen, London)
Henry Treece: Dylan Thomas (John de Graaf Inc., New York, 1956)